

秋齋開語

4

庫	文	閣	内
二函	二五	一四	和書類
一册	四	四	類

内第...書齋

冊...四共

(一册)

	二	和
	五	書
	一	門
	五	
四册	四函	四號類

指鑑

内閣文庫	
番號	和 25154
冊數	4 (1)
函號	212 4



家
吉蘭

煉齋卦法建業

煉齋圖

煉齋圖

煉齋圖
吉蘭

秋齋桂先生著

秋齋閒語

浪華書肆 柳原積玉圃

雨路

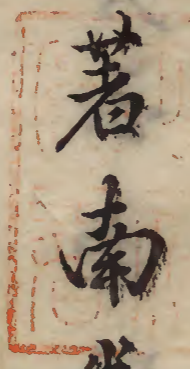
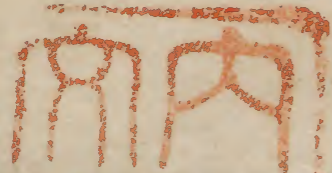
秋齋閒語序

桂公案以著南嶺子前已

行于世人或採其秋高月

語者于遺稿中始尋梓焉

錫序于余曰昔者左太



冲虚三考而自以為不
于班张也然時人猶未
皇甫士安之序出而後
價為之貴云由此觀之
之輕重以序者之名高
與

否乎非耶且夫南嶺子
人以傳則此其後篇而
誰取波舍此耶桂子之
見不待序者彰明較著
遂序此

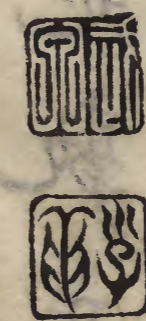
寶曆癸酉冬十月

華江北真子撰



夫說之欲知無是無非者
無著明乎孟荀也孰是性
善而非性惡乎孰是性惡
而非性善乎果其說之非
乎是乎昌害於是非取舍

六 在我已秋齋閑語新刻
既成而問叙授以此言
癸酉之冬武泉題



秋齋閑語 目次

- 一 以呂波論
- 二 辨大天縁日ノ考
- 三 片男浪
- 四 玉緒ト云言葉
- 五 萬ノ字ノ事
- 六 摩羅ノ字
- 七 旃陁羅
- 八 八開手ノ事
- 九 都築平太刀
- 十 夢ノ論
- 十一 奥ヲ菜ト云
- 十二 耳塚ノ事
- 十三 竹ノ箸
- 十四 和訓ノ論
- 十五 南天ノ葉ヲ敷
- 十六 川骨ノ事
- 十七 殿論
- 十八 瓦 辨
- 十九 覆槽ノ字
- 二十 ハソウノ論
- 廿一 佛事ヲ忌
- 廿二 笏 辨

九三 篝ノ者
 九五 吉野山吉水院
 九七 柳管ノ事
 九九 刀和訓
 一〇一 名ヲ切誤
 一〇三 薰物論
 一〇五 スカヅクト云言葉
 一〇七 契沖ノ事
 一〇九 白雲似帶ノ詩
 一一一 新艘ノ論
 一一三 仲尼ヲ貴
 一一五 下帶ノ事

九四 山ノ根ト云
 九六 女ノ言葉
 九八 神璽ノ字
 一〇〇 鳥祥ノ論
 一〇二 音通字
 一〇四 黒方ノ事
 一〇六 志賀山ト云哥語
 一〇八 ハチノ論
 一〇九 衣通姫姿繪
 一一一 又ト留ル假名
 一一三 絹垣ノ事
 一一五 菅公ノ事

四七 菅公画像
 四九 紙二條ヲ引
 五一 南嶽大師
 五三 車ニ乗事
 五五 大部書
 五七 螢火辨
 五九 須磨記
 六一 人足ヲサスト云
 六三 采木綿價
 六五 講談ノ論
 六七 杏葉ノ辨
 六九 守瑞

四八 宸翰ノ辨
 五〇 長谷寺本尊
 五二 短哥長哥
 五四 猿樂番記
 五六 急死取
 五八 五十串ノ事
 六〇 公卿補任
 六二 上巳ノ辨
 六四 和讃ノ事
 六六 仲尼ニ鬚眉ナキ
 六八 古ト事
 七〇 縮緬ノ衣

七十一 泰始シニシクハウ白玉シユニシク

七十三 荀子シユニシク性惡セイヤク

七十五 古學コガク先生セニセイ洛陽ラクヤウ卜書ウツショ

七十七 慶ケイノ字

七十九 養男ビョウニシカツラ

八十一 神詠シニシクノ事エ

八十三 ノラノラ猫ネコノ哥カ

八十五 宸翰シニシクノ額カク

八十七 天井テンシヤウノ辨ベン

八十九 三笠山ミカサヤマ

九十一 保昌ホウシヤウノ事シヤウ

九十三 百人一首

七十二 老子ラウシニ元ニツクモト

七十四 上ウヘ厭ウツクシ日ヒ

七十六 男子ナニシ娥コニキ日ヒ義ギ

七十八 女メ古風コフウノ姿スカタ

八十 モニエ鳥トリ帽子ボシ

八十二 愛宕アタゴ檣シキ

八十四 神主シニシク祭マツル食シヨク

八十六 酒サケ吞ツク童子ドウシ

八十八 鯉イサナノ論ロン

九十 天竺テンシク正月イツウキニ辰月チンゲツヲ用モチユ

九十二 鎌足カミタリ公キミ産取サンシヨ

九十四 長手ナカテ杖スグヒ

九十五 トロノノ事

九十七 具足グソクノ餅モチ

九十九 烟管キセルノ辨ベン

百一 羊頭ハツツウノ論ロン

百三 小太刀コタチノ事

百五 膝ヒザ九ノ論ロン

百七 首クビヲ遠方エニハウヘ送ツクル

百九 武士ブシ爭論シヤウロン

百十一 馬ウマノ鞍クラテ手テ取カク

百十三 陣チンノ扇アウキノ辨ベン

百十五 編笠アミカサノ事

百十七 革カハ鏡ヨロトノ事

九十六 且也タニヤノ字

九十八 粥カクノ事

百 セキセキツルノ辨ベン

百二 酒サケヲククコト云ト云

百四 疊タタミ上下シヤウゲ

百六 鎌倉カニクラ下サチ緒ヲ

百八 馬ウマノ相性アイニヤウ有ル

百十 中直ナカナラシ益セキノ辨ベン

百十二 鏝シラカヲヌクク藥スリ

百十四 斤シノ俵ヒラノ事

百十六 弓ユミノ流義ノウギ

百十八 武士ブシ素性スニヤウヲ不ガル構セバ

百十九 母衣袋

百廿一 調度掛

百廿三 車カ、リ

百廿五 故實ノ字

百廿七 造太刀ノ辨

百廿九 様ノ字ノ事

百卅一 肴ノ字ノ論

百卅三 馬ノ渡リシ

百卅五 郭公ノ名

百卅七 鷹ヲ一羽ト不云

百卅九 刀ニカスカウカイ

百卅一 太刀ノ垂

百卅 罪人ノ名

百卅二 弓ノ神

百卅四 平馬藤馬ノ名

百卅六 笠掛ノ事

百卅八 太刀折紙添狀

百卅十 猪ノ目ヲ明ル

百卅二 婚禮秋ノ字忌

百卅四 千木ノ論

百卅六 鷹ノ始ノ辨

百卅八 鷹ノ鳥ノ事

百卅十 人丸像ノ事

百卅二 北面ノ侍

百卅三 冠服狩衣

百卅五 社司着服

百卅七 蝶袂ノ論

百卅九 中啓ノ辨

百卅一 侍烏帽子

百卅三 風折ノ論

百卅五 神ノ御装束

百卅七 目貫ノ事

百卅九 革筋不忌

百卅一 扇ニ物ヲ書

百卅三 弓ニ張ノ事

百卅五 蘆手書

百卅六 襪ノ辨

百卅八 儀仗ノ事

百卅十 扇ノ要ノ論

百卅二 直垂ノ事

百卅四 引立烏帽子

百卅六 纒纒ノ事

百卅八 拙輕ノ太力

百卅十 太刀ノセメ

百卅二 蟹取漆

百卅四 小サ刀大ニ子キ

百卅六 太刀ノアシ

百卅八 金作太刀

頁七 窠ノ鏝ノ論
 頁九 弦代衣ノ事
 頁十一 夜ナベノ辨
 頁十三 壺ノ石踏ノ事
 頁十五 屏風ノ事
 頁十七 鏡キセナガ
 頁十九 十語五草
 頁二十一 無間鐘ノ辨
 頁二十三 鸚鵡返
 頁二十五 雲林院
 頁二十七 年号ノ元ノ字

秋齋閒語四卷百八十七條

頁八 火寺袋ノ論
 頁十 ワタミシ粥ノ辨
 頁十二 香物ノ事
 頁十四 扱ニテ首ツグ
 頁十六 屏風ニ色紙ヲ張
 頁十八 忍ノ緒ノ事
 頁二十 ドシヤウノ辨
 頁二十二 行燈炷灯
 頁二十四 謠誤ノ辨
 頁二十六 直菜蓴菜

秋齋閒語卷之一

秋齋桂先生著

門人多羅尾守脩校

① 筆中抄曰以呂波四十七字本秋初也自以迄遠十二
 字護命傍正作之自和迄末三十五字弘法大師作之
 蓋本林凡字十二摩多三十五體文而統四十七字其讀也如
 秋 天云くうわのわくふくふこへてりききやめみーをひもす
 ② 辨方天の縁日といふ己の日と用ハ何より事
 少也最勝王經と云事ハ星月の八日白月此八日わつ天竺
 ハ十五日と一月うして星月う十六日うりて一月うて白月
 とハ志くれハ八日と廿二日よてるをさべり僧徒からせり
 わるうれ古学先生語益の考ハ全く呉氏吉舟漫添さて

ハ都京山の時習新智よりりるものあり何とてけニ
書よむはけく中ハあるらん自己の發明は格よかれや
都氏ハ明の萬曆のくわり

三 紀州和哥の浦ハ男浪をうらうらして女浪とけけ
よあめを片男波とよむと中人あり和歌の浦は塩と
くれハかたかあとのあづとて田舎あきつるこのあ
汐みらくれハ浮とあめあづハ脚語なり浮ハテ浮なり
片男波ハあづ

四 古書よむもりのあづ小た又あづく玉の結ともよむとんハ
梵語よ者由飛とよハ瓔珞の事あれハ和語ハあづ

五 無事ハ常と李氏雜書よふへり予と句 穠沃

名義屋集代よむは知是西域萬字佛自前よむは吉祥
相也云く正小あづためハ大周長壽二年主上推制此文
著於天樞音之為萬名も同書よハ聖音萬是吉祥勝
德之相ハ章安疏云言伊字一 下畧 ちうまハ伊以通ぞ
あづ不事 改常とつふあづ

六 同書小魔羅と註よえ輪云秦言能奪命 中畧又
能奪智惠命又翻為障為修道作障礙云く或言惡者
多愛欲故云 陽根よけ号と取一も一切のさりり見り
おころりあづ

七 旃陀羅同書よ曰此云屠者正言旃荼羅羅此云嚴熾謂
惡業自嚴行極鈇持竹為標幟故若不爾者王必罪之法顯

ちくとしてんはらふとせやめりしきあまぞありぬ

①尾洲橋邊の船屋に中まれば方よ先年一宿

せよまうまやたるけりハ色色水菜まらうがくく

そまよひこそ中まらふといふとまらぬのまら

川魚のふきと中まらふといふと中まらふ

ふらりておしハ船ふりてまらふといふと中まらふ

魚とよあまハ魚とあまといふ事もあらぬや

②耳塚の事そのうと神切皇后之轉と依て耳と

外まらう船おまらふ香雅と船とめしと後ハ橋太島

茶家お長奥筋の軍と橋との耳とて河内由

塚と耳納古と建とまらふといふ事大佛は耳塚

ハ力之度めれ事ヤリ

③竹の着因膳式よ又着竹とそまらりて氏と揚りし

み性氏縁よんえとり若のまらりて竹よ降ひてり

ぬきハ今の俗竹のまらひむまらりて竹の故実よあら

④和州分符とれ義理と付る事と附合とすたハ車ハ

くるくまらる相おくるまらりてのまらハ車もはた

和刺まらるハ義理の和刺まらるまらるくまらる

いりまらるくといふの刺ハおまらるくといふと

本邦の本常人の附りあつたさむいさむいかなりといふ

事なきかハ縁もまらるとまらりてまらるハ天より交ぬ

本草の古以呂音勝於律故以呂為自音以律為助声王仁
 以知其古本之應呂教之と云々云々云々云々云々云々云々
 所ハ漢者あるハ其れ其受る日本ハ自呂音より近く呂音勝
 於よかると云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
 と教也今用らるハ漢者之後世にありてハ漢呂の二音亦あり
 ありて所謂ちぢくたよと云々云々云々云々云々云々云々
 和名ハ律代りのまゝにして呂れ音にかり自和と呂音にひ
 とわたり故ハ空海之ハ和名其古書の書れれ也云々の為といろ
 ハ字ハ八字と違へて一字も漢者をと不用呂音と云々云々
 に據らざりけハ本音と知らざれといらハはの音も多敷一
 十五 抄交物や云々云々の音ふくまふと云々云々云々云々

ひ方と事めや類聚新要第一上紙十八枚挿交紙
 と云々云々

①十五種の菜は養老川骨入と云々云々の菜は養老の
 河海抄よハ十二種の菜とてその田よ松とわりち
 松の葉ふかりとも小大根なりとも公事根源よ小大根
 と云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
 温菘崔高陽合食經云温菘味辛大温無毒
 者也云今採とるハ類聚新要一字活平等温菘
 御撰の抄よ干物五杯海松青苔牛房川骨蓮根
 とわり川骨よ製製りて菜とありよ一ハ人も作と
 小ぢり松の根よまなると云々云々云々云々云々云々

十七 所方しよほうと殿とのくしよおほり皆殿みなとのの殿とのありて
 公こう殿とのふてい何なに殿とのとやしおよりやまといふりあは
 たり何なにと子こ代しろを家いえ長ちやうの家いえれ門かど表ひらあはれ何なにと
 殿との家いえ何なにと世よととせむらひの何なにや一ひと殿とのもあはれ
 殿とのよ家いえとまわらう何なに殿とのと何なに殿とのとありて
 りよあはれや

十八 瓦いとかりしよむハ梵語ぼんごなり世よみかきて改かめ
 ぐく延えん表ひょう式しきの忌よみ約やくふハ寺てらとらうとせし出でせうてふ
 和わ語ごなるよいて梵語ぼんごのかりと用もちらもかう一ひと或ある人の
 えより教きやうよおしれうりしよむいりかり事ことふやと
 何なにとまうは漢わん武ぶ帝てい東とう方ほう親しんれ回かい答たふと引ひて屋や上うへノ

瓦いからや我われ者ものある故ゆゑ事ことよむハおしれ瓦いの
 事ことあらしりりあはれしよむはさうと書かてとちかありぬ
 十九 覆ふく槽そうの二字ふたごと并なら代しろ是こゝようけつせとよまをせたり
 槽そう今いま云いふたういなるいりせての空くう虚こなる心こゝろよて
 うけしよ今いま水みづの黒くろかふおけしよおれ名なのけの
 てんしよありとや傳つたへ事ことは信しんと信しんと武ぶ文ぶんの麻あ呂ろ首け
 ありさうといふおはれハ掃はら首けあしりあはれいりあはれ
 よくそしよ細こしとあやまらうておけしよよや水の黒くろ
 の方かたハかいつりよ一ひと古こ書しよよあうのわしりりあはれ
 肥ひちあふ今いまよ桶おけといふ桶おけとていといふちとて
 むれいあはれしよりりあはれ

二十 とうとう湯水とつぐあわく倍より湯桶のたかり
 らぬよゆめてもあふてもほきてたぬおへけさるお
 なるよまん終ん
 とつといく堂上方え抜の細度宿宿候式のたぬよ
 たごうといひあつきたりいむんやさんごうといよだ
 あはまるとや

三十一 子の始なりぬゆといひ事堂上の風なりやまひ
 ともらるといひおらび不常といひまこと終末といひあ
 よぬより席門跡方ハ出あよてましまはよま風うら
 て席門よりよりおのゆつをいせしる年始の清文
 なるの候付は縁發中とあつらへ延長式たれ忌

朝よ倍と倍長といひより起りたるあるべましといひと
 より席候方のゆ方の候付忌も理よけり
 三十二 筋よえり筋といひ名筋あり靈具ありてむりい
 えをとあせしと中傳へ目出候候式よ司らる事ん是
 まりわりしと共ありにえを房つとせし席方れは不持
 の初よてげん次方昇を降しはめて度人の後よなる
 べき人あまはそ人の不持れおとてえを房れえのよとら
 てむり筋といひよりあやしき候記よりせよとやれ
 候まきま

三十三 系初洛外と書新久四人ありあ人が
 別も昔ハ林表と屬し一人所小舎人新久と星は職系

おまも良家子補之とせり是利の御代四十八ヶ所の
 梅者といふ是く平紀中四よ敷法平良忠といふ大炊御門
 沖小治の毎小津五席の御厨五捕とせり
 向の治平よ毎の難気等とせり
 ⑤ 山の根といふは頂上の事なり富士の根といふは富士
 のよりれはるの道といふ事なりこの事よかへてよるる
 多しあやむし甲斐の根も甲斐の陰祖ありては縁
 くはら縁するてのあり家の頂上とて根といふも
 知るし一孝又根とみゆとよしも深根なり極深の字
 とことよむゆいゆらおとせりありし一海山とせりも
 大山とせりもやまといふとよむ大山とせりよむはるむとせり

吉村春孝
 三三三
 字三三三

陽し海山大王大柱の柱ありて君と大君といふは
 家といふも是く一太の字をふとてはあふとも
 穴賢も大賢なり穴ハ修なり神女記よ太と
 あふし初めしなり

⑤ 吉村の南陽院といふは南陽院は名ありその内よ
 桃樹院竹堂といふは人ありてかへりては吉村山よ
 春の院といふはりて平紀よ吉村の法平宗信とあり
 けはねおふて後醍醐天皇れ始とせりし妻やあり
 一り今ハ清信のちとありけちよ親信の自筆に
 職系ありし今指とるよ吉村拾遺よみりてはこれ
 ちちとていん今いりりて花はさるあんと後醍醐帝

のたぶせめあまのりよは冠さうんはハツ川ともまろく雲れ
 ねりときるへよみよ〜れいこさやとらゆけさあてれるあそ
 ③女のこととをいやりうらあつとさうんはハツ川と源氏
 あ徳よハハ帳一よりひとさうりあつまやれきよハハ帳
 一と〜とさ〜もめて〜

③式人の同々のハ柳管とをさうんはハツ川と源氏
 いんとさうて曰今世よ云やあひを〜りあハ古れむい
 け〜へあ〜り〜おまふあふもん〜り昔ハ縁あ〜り
 ね本の細枝と紙よりあてむいむいあつてれ〜脚
 あふ〜細枝と七ハ本あ〜てむいむいあ〜り後世あ〜り
 か〜りと〜脚ハ平板よ〜り〜もむいむいれれ形とあ

〜て三角の白木とむいむいあ〜り稜のあ〜ハあ〜り
 むい〜と横〜りあ〜りねそのうと割〜り〜むいむい
 あ〜りハあ〜り小枝柳よ〜りハあ〜り〜り
 又練紙の糸友さ〜りハツ脚のれ〜りあ〜り練紙のさ〜り
 と〜りもむいむいれの脚のさ〜り〜りあ〜り〜脚
 ねよて是も質素の耐細木と〜り合〜りあ〜り〜り
 の〜りあ〜り〜り又同々のハ練紙者〜り〜り一流の
 案あ〜りてハワあ〜りれれハハの救〜り練紙の定数あり
 さ〜りハハ帳の後ハ乙女あ〜りあ〜りてハハと〜り〜り
 い〜りあ〜り儒門あ〜りハハと〜り〜りては門もハ相
 成道ハ切徳他ハ徳と〜りあ〜り〜りて皆ハの救〜り〜りハ

陰殺の終り成統の殺あまはいつまふも四月十八日改
まじい殺ハ丸よ終るなありはいははきり始めていつまへ
その殺とかりつらふや答て曰冬河のハワ格よむおく
ハ解教さのし神々へかきりつらふもむく東海南北よ
四隅と加へて八方よれは天地の四方よあるおは殺よころり
かろくに我らよりとよんハかろくあるをよりとより
かハちつにと答へき

②六 神璽璽の字玉よはへる字とをゆーよりさぬくの
矣況わり去よはへる字あると説文と見え方失なり故よ
神璽の女とわろハせり
②九 刀とかとあよむと所又の物格なりと貝原篤信

念れられた馬場信雅考よ片羅の下略あろんとは
況よ一よおきハ法ぬあれハなり

②十 装束文飾推法一巻を宣法説く所り終るに
の指責名なるとの事ありそ地文よるれ終る所りそ
名と比翼をなるとしてふと出せり二羽の名れ尾と尾
そら合てとあれぬ終ありそあろ方宣法あふて化服
貪よせしそよて長尾よて女尾とくそあきわいせし
おありは羽あふつとさく終あふゆべきよ尾のけさ
よハ連尾名もよみへし終るた云名ハりらくくの
文よもよんはまかろくつと一向鷹造杜撰の事ありける
あーとさうて見えし一名尾名とあんいんくあやーむじ

又同書も絶の文極か一層草の字を添へて豊か玉
 菱歌の池よ菱れうらひなる辭と見えて識とわく一とあり
 古書よんいふにけいん屋まはらんと草^{仙人}なりとて又
 極か一はもくつと草の極と畧せらぬの由とあきハ一口
 友古ゆてりからか^{きい}菱歌の池のゆとハ^い齣^い齣せり
 (三)壺井翁撰述の書も壺井安富^か智著^ちとありいふある書
 式もや安富と字といふ^り帯も安富と名のと名^しの^しと^りなり
 もや近代二字の姓と一字よ切て書ゆいすあはり是は
 姓と私よ切い^いうあきた^ん屋^ん風^んと一字姓よと^りた^りり
 書かるべ^い一あね事たる^りんや名^の字と切^い一向
 編よ及む^いあき^りは^り山^に保^を爲^す朱喜よ^て字^に似^る

あつ山^に保^を嘉^とと^りき^うとえ^はへて安^とま^りりもの
 壺井翁^のの^しま^りも^かる^る保^あり^や
 (三)古来ハ青^れか^るる^る字^ハ義^とと^あて^て似^借せ^りたり
 橋氏の^の字^とい^はれ^ばと^はは^りと^して^りと^しめ^り
^まり^り保^を書^す本^を書^す保^をも^いと^しと^して^りと^しめ^り
 是^ハい^はれ^ばあり^きよ^の保^を書^す本^を書^すも^もなり^き
 其^ハ上^は是^ハ川^と書^てり^とら^りハ^とは^り保^を書^すり^とし^き事^也
 も^も保^氏と^り保^字え^ま出^の字^と同^字あり^て出^出た^て
 よも^も書^をと^らる^ると^らり^もあ^はれ^はく^の氏^も出^自と^り保^よ
 り^りも^も出^自保^{あり}り^り出^も保^も交^脂の^同韻^{なり}
 たり^り出^と保^ハ保^と書^てり^と保^上有^保保^不得^の句^ぞひ^合字^とも

和齋問語
 十一

源氏物語の如く山々なるなまぬと作りて
 おの地よりつらつらよりなまぬのけあひひよ香色の
 うゝおの後の書後一決のそくの格と兼ぬ道遠度定傳云
 の五月由の記よくり

類聚雜要の如く正の方あまこ出て是れおの
 古方ともつらつらに思方のゆえ兼ぬ國より格へ
 方ぬ兼ぬ方なると思方と云ふも兼ぬ
 又へり

もれもとぬげく子細いとぬりよ額田
 皇女あてぬてつらつらいと席あも地ぬとほけてれと

あはるなり

志賀の山とそりハ藤よけハ志賀の山とよあ
 バ藤ありと東の井戸のやまよりつらつら藤の別ハ他日
 ふて地ぬ目とさる公と兼ぬのまきハひり事あやさるハ
 一夜二夜といひつらつらハ他日あやハ

日本書紀全部二十卷壺井氏のまよりつらつらハ
 松ト見林の本と兼ぬ沖の本と兼ぬ合せハ小ころ兼ぬ沖の
 本とらるよすがれつらつらハ小ころ兼ぬ沖の
 珠よりつらつらハ小ころ兼ぬ沖の
 日本國關のまよりつらつらハ小ころ兼ぬ沖の
 おののまよりつらつらハ小ころ兼ぬ沖の

① 或人たむれてへちまの刑と致しよそ居せざりし
 事なりとも漢名系氏和名をうり信州進んでいいと
 畧してトフリと申すたといひはにほへどちうぬると
 Pへト千の百あきバへ千てとよふやと當流よ答へし
 日本古来の和州もかろるゆのるいざらん
 ② 都の良香の白雲細帯 繞山腰と仰るまうしる葉
 葉せ七仍若未祥秋よ初かきこのみくこのふれをいよせる
 かを谷川のおとのさやけさからあよりかひけりし
 ③ 衣冠遊娘の姿 終よ階堂とのかせらまうしる
 我貴子うましきよひかりさくふのくぬの
 ころまひかひて掲志意掲の字感入念は亦日本書紀

むくものねをかひとけりつひのほがさうまひ事傳へ事しや
 ④ 尾羽和冬船をふてよあ入の事 爾人新く船とに
 らくをさたよ婚しよありの致とまへ是よのせてちるた
 ちと出船艘ともいふ名ごや 堀川へ其る海船よち
 級付るあし古風なる事や
 ⑤ 假名およぬとあは漢字よ釋とんハ矣の字わり
 万葉集十六のあよ者矣とあはあけんゆよてぬ文字
 片ふべしとかあへぬらぬあくハ詞多し
 ⑥ 近世の儒者仲尼とあり事 僧侶の釈迦とありしは
 石ハ徳のあきる不賢ハ文の秀るるああるに不賢と賢と
 と改りして伝やういよはは是より學問も是れより

罕四 暫易ふて遷宮の内神所とて一絲宣持てゆくは
 けのま縮よて是とて縮よとまんふとてめんまんといは
 縮垣なり一國史の如く是とて縮よとまんふとてめんまんといは
 家垣と書り神代志よ朋友とてとまんふとてめんまんといは
 くの垣とおおしくたひよとて縮よとまんふとてめんまんといは
 とのゝあゝんよえん而敬はひらた中おの垣とせまといは
 んがんとて縮もといは

秋永開語卷之一終

